

令和8年度全国学力・学習状況調査結果について

彦根市教育委員会
令和8年8月

令和8年4月23日（木曜日）に、全国学力・学習状況調査が実施されました。中学校英語の実施日は、学習者用端末を用いたCBT方式のため、「読むこと」「書くこと」「聞くこと」については令和8年4月20日～4月23日のうち1日をあてて実施され、加えて「話すこと」については令和8年4月24日～5月29日のうち1日をあてて実施されました。

今回の調査を分析して、この調査から見てきた本市児童生徒の学力と学習状況に関する結果をお知らせします。

調査の目的・内容

(1) 目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、

- ・全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- ・学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- ・そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 調査対象

国・公・私立学校の小学校第6学年 中学校第3学年 原則として全児童生徒

(3) 調査事項

①児童生徒に対する調査

ア：教科に関する調査（国語 算数・数学 中学校英語）

出題範囲は、調査する学年の前学年までに含まれる指導事項を原則とし、出題内容は以下のとおり。

- ・身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
- ・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関わる内容。
- ・中学校英語は、CBT調査に基づくIRTスコア

【Item Response Theory：項目反応理論 国際的な学力調査（PISA、TIMSS など）や英語資格・検定試験（TOEIC・TOEFL など）で採用されているテスト理論 500 を基準とした得点】で示しています。

イ：質問調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等

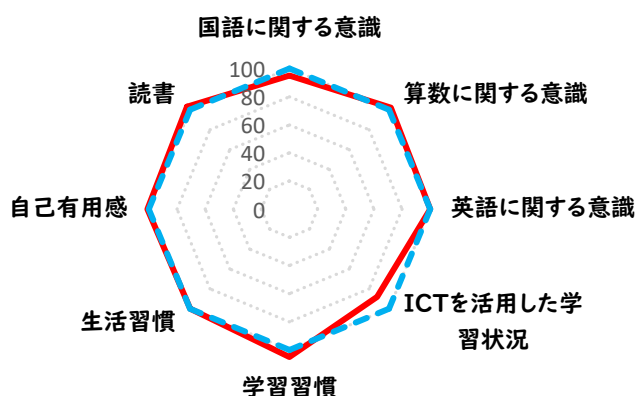
②学校質問調査

学校における指導方法に関する取組や学校における人的・物的な教育条件の整備の状況等

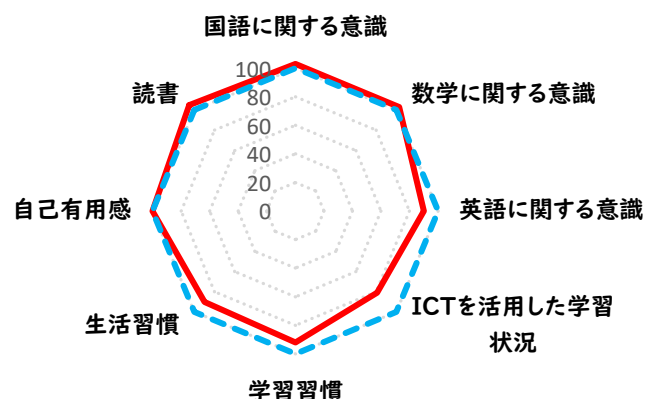
調査結果の概要

*全国の値を100としたときの市の値を表しています。■全国 ■彦根市

小学校

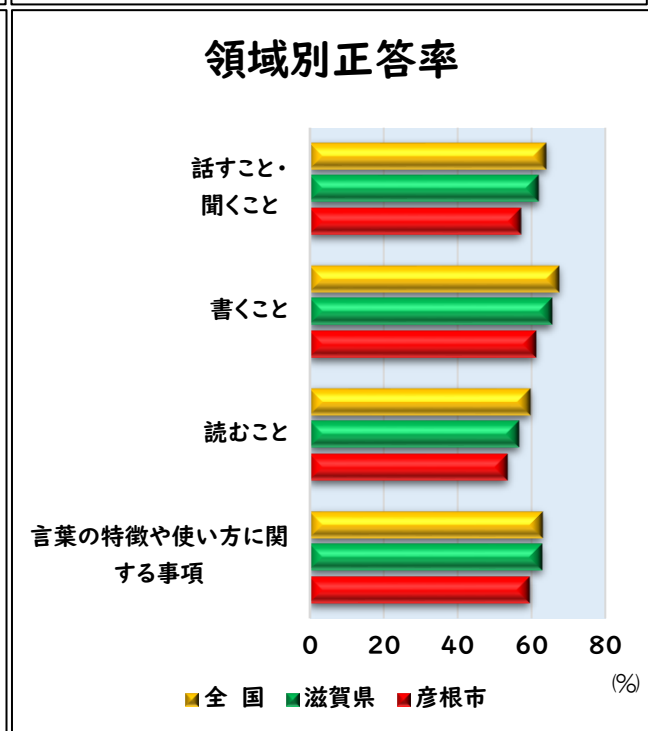
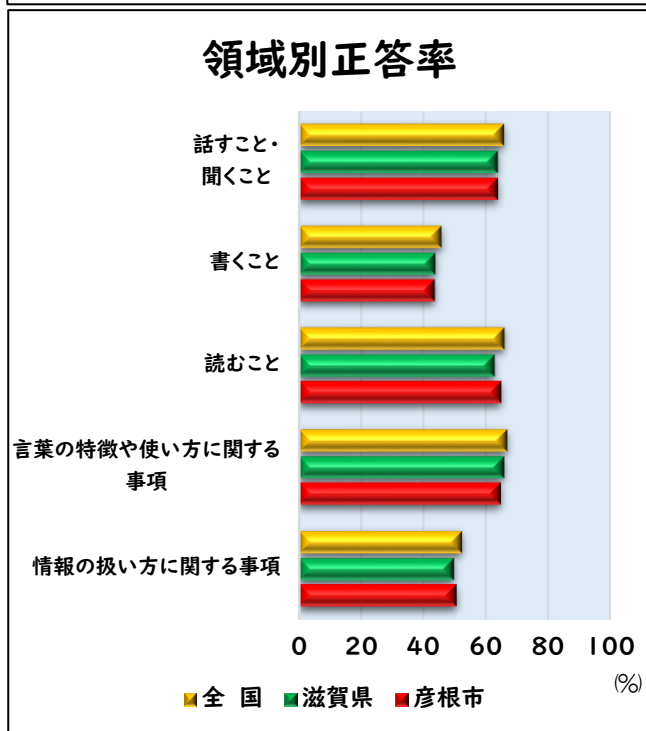
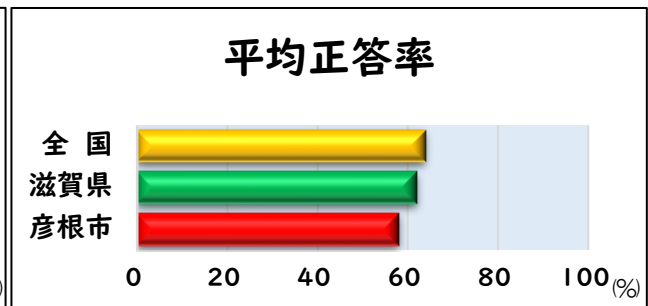
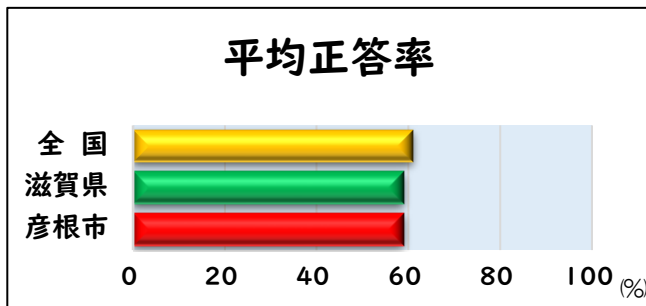


中学校



小学校（全13問）

中学校（全15問）



この調査から分かること

（結果の概要）

- 平均正答率は、小・中学校ともに全国を下回る結果となりました。
- 領域別正答率を見ると、小・中学校ともに、全ての領域で全国平均を下回る結果となりました。
- 小学校の記述問題では、「【文章】を読んで考えたことを、自分の経験と結び付けてまとめて書く」問題は全国平均を上回りました。一方、「【文章の続き】の空欄に入る内容を、【集めた情報】から抜き出して考えが伝わるように書く」問題に課題が見られました。
- 中学校では、全ての記述問題において、全国平均を下回る結果となりました。
- 小学校の記述式問題の無解答率が全国平均よりも低く、粘り強く問題に取り組む姿勢が見られました。中学校の記述式問題の無解答率が全国平均よりも高い傾向でした。

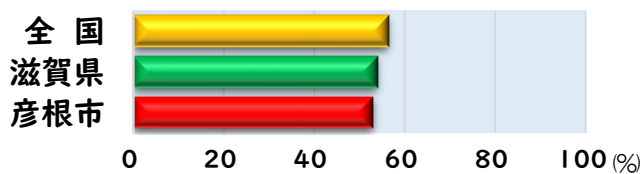
（求められる力）

- 小学校では、「目的や意図に応じて、複数の資料や文章から必要な情報を取り出して整理し、自分の考えと根拠を区別してまとめる力」を身に付けることが求められます。
- 中学校では、「文章構成の工夫や効果について考え、根拠を明確にして記述する力」や「目的に応じて必要な情報を選択し、読み手の立場に立って文章を整える力」を身に付けることが求められます。

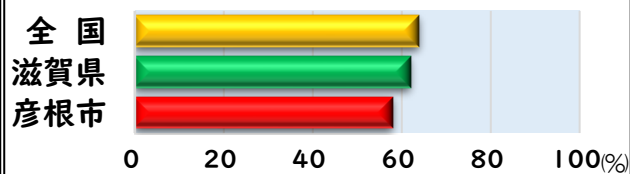
小学校（全16間）

中学校（全16間）

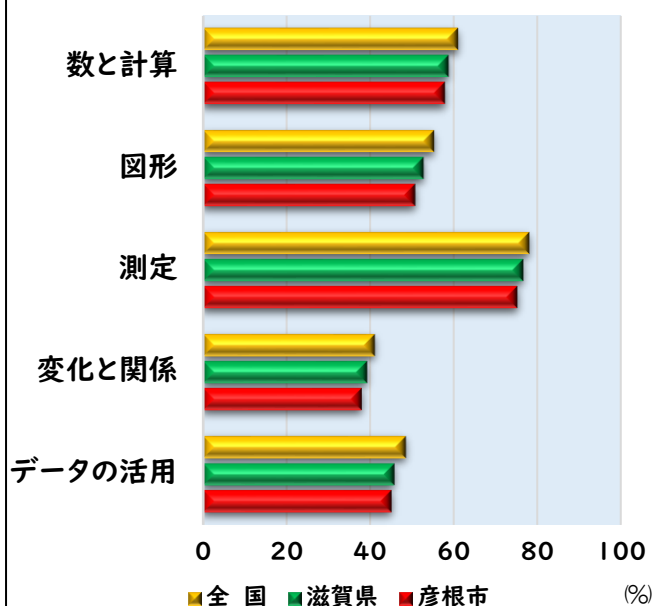
平均正答率



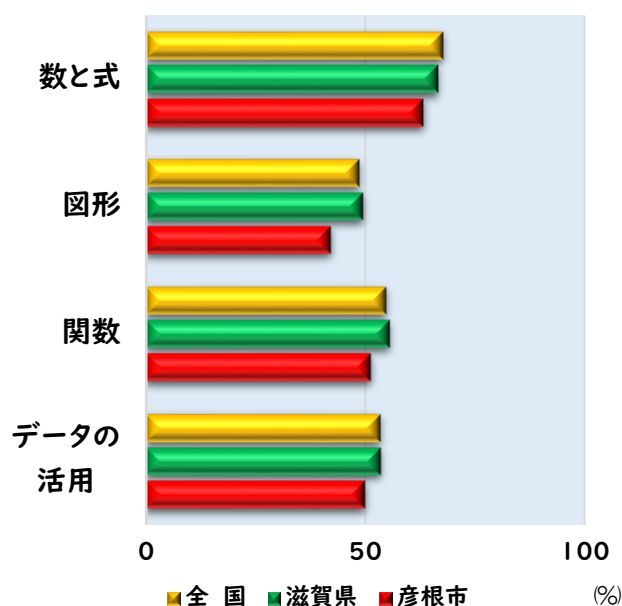
平均正答率



領域別正答率



領域別正答率



この調査から分かること

（結果の概要）

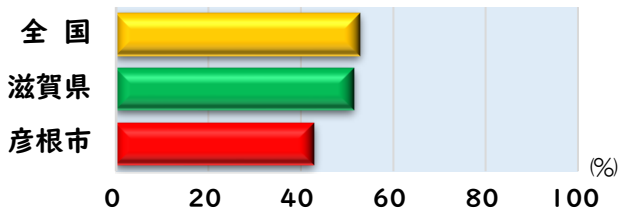
- ・平均正答率は、小・中学校共に全国平均を下回りました。
- ・領域別正答率を見ると、小・中学校ともに、全ての領域で全国平均を下回る結果となりました。
- ・基本的な問題で見ると、小学校では、「一辺が8 cmの立方体の体積を求める式を書く」問題、中学校では、「四角形 PQRS において、PS と QR が平行であることを示すための根拠となる二つの角を書く」問題などの理解度に課題が見られました。
- ・小・中学校ともに記述式の問題に課題が見られ、特に中学校の無回答率についても課題が見られる結果となりました。

（求められる力）

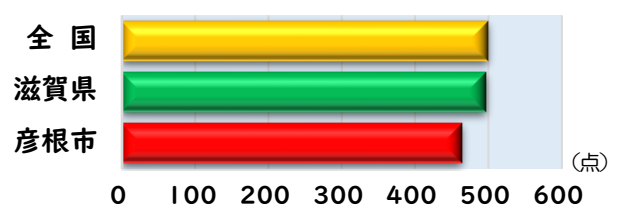
- ・小学校では、「図形に関する値を求めるための関係的な理解や基準量、比較力、割合の関係を正しく捉えることができる力」が求められます。
- ・中学校では、「目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を数学的な根拠をもとにして説明する力」が求められます。

中学校（共通問題7問）

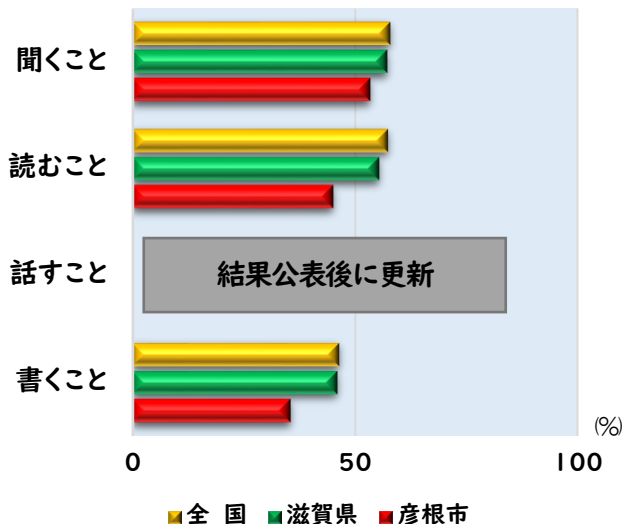
平均正答率



IRTスコア



領域別正答率



この調査から分かること

（結果の概要）

- 平均正答率、IRT スコアについて、全国平均を下回りました。
- 領域別正答率を見ると、「聞くこと」「読むこと」「書くこと」の領域で全国平均を下回りました。
- 「読むこと」、「書くこと」における「音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能」を図る問題に課題が見られました。

（求められる力）

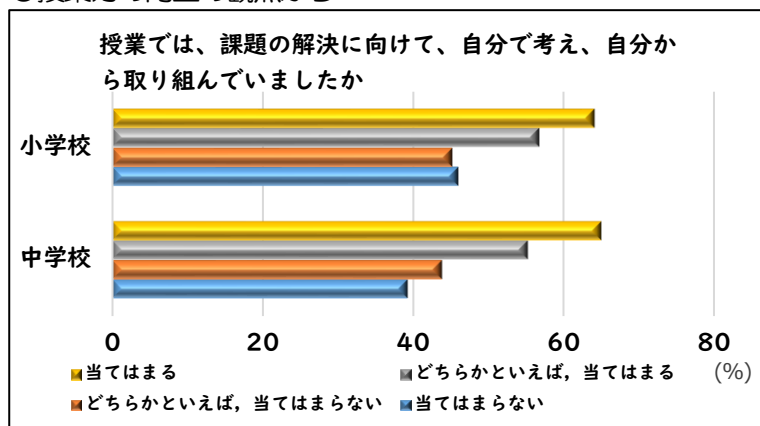
- 「知識や文法構造を統合し、相手や目的に応じて自分の考えや気持ちを伝える統合的な言語活動の力」が求められます。

教科に関する調査と質問調査とのクロス集計から

教科に関する調査と児童生徒質問調査の関連性を把握するため、グラフと組み合わせて視覚的に分かりやすく相関関係を整理しました。一般的に明確な階段になっている程、関係性があるとされています。

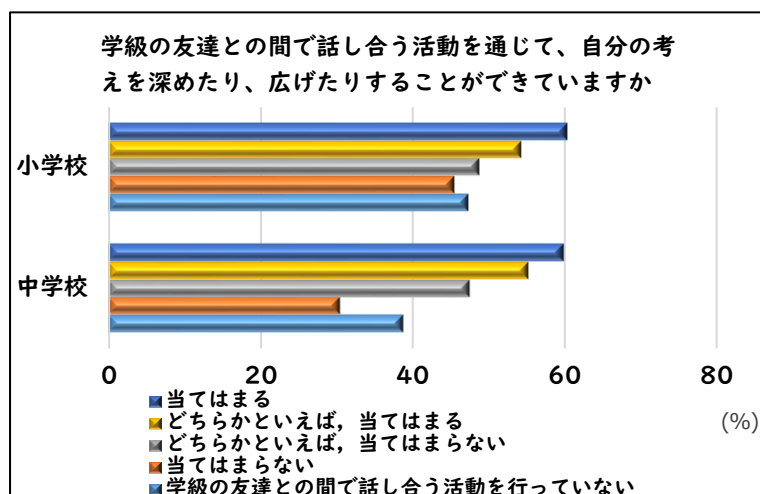
※グラフは、各質問項目において、それぞれの選択肢における「国語・算数（数学）」の正答率の平均値をあらわしたものです。

○授業力の向上の観点から



「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」という問いに肯定的に回答した子どもは、教科の正答率が高いという結果でした。

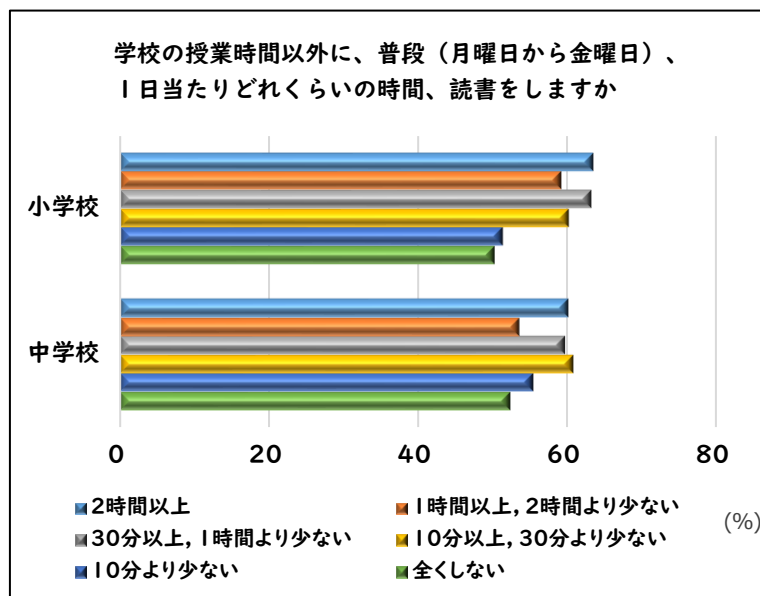
子どもの「もっと〇〇してみたい」といった意欲が生まれる授業を推進し、学びに向かう姿勢を育みます。



「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」という問いに肯定的に回答した子どもは、教科の正答率が高いという結果でした。

協働的な学びを通して、「なるほど」「そのような考え方もあるのか」など、新たな気付きを促したり、自分の考えを確かなものにしたりして、確かな学力の向上につなげます。

○読書の観点から

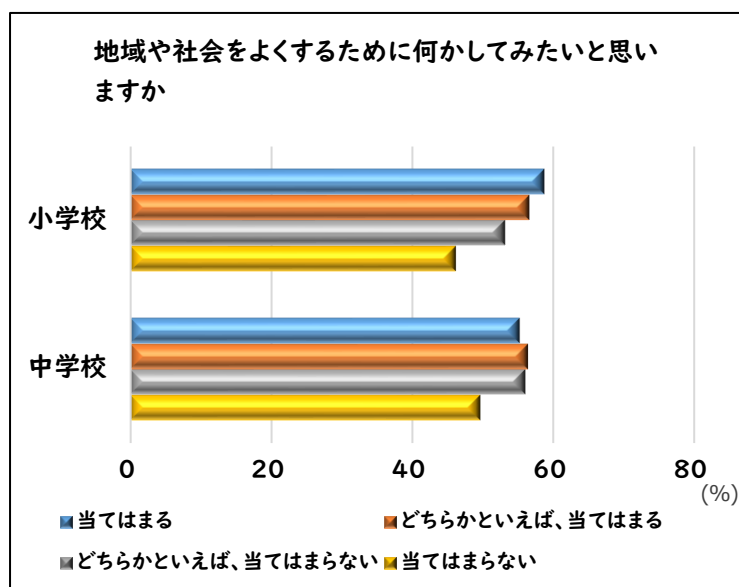


「1日当たりどれくらい読書を読みますか」という問いについて、読書をしている児童生徒の方が、教科の正答率が高い傾向が見られました。

読書を通じて豊かな言葉や知識に触れることは、すべての教科の学びの基盤となる思考力や表現力を養います。

学校図書館を積極的に活用した探究的な授業を推進するとともに、ご家庭とも連携しながら、子どもたちが日常的に本に親しむ読書習慣の定着に、引き続き努めます。

○地域への関心の観点から

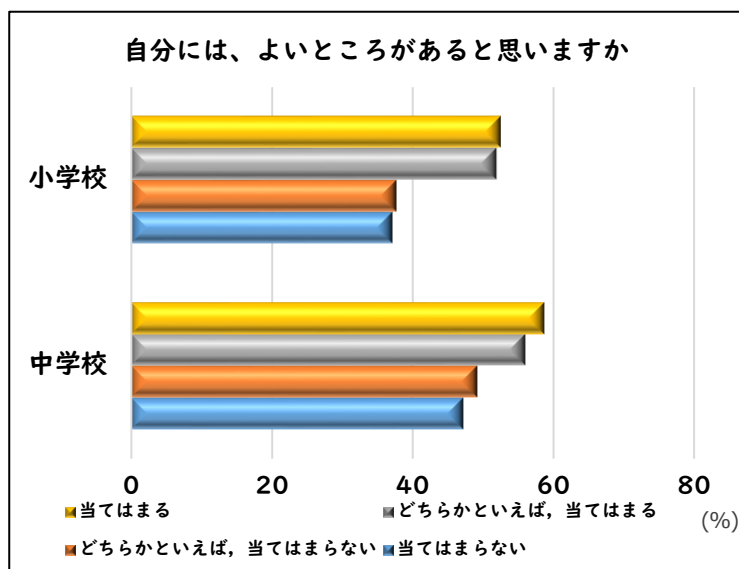


「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」という問いに肯定的に回答した子どもは、教科の正答率が高いという結果でした。

地域や社会とのつながりを意識し、その一員として貢献しようとする態度は、深い学びや思考力を引き出す原動力となります。

今後も地域の人材や教材を積極的に活かした郷土学習を推進し、ふるさとに愛着を持ちながら、これからの地域社会のあり方を主体的に考える子どもたちを育みます。

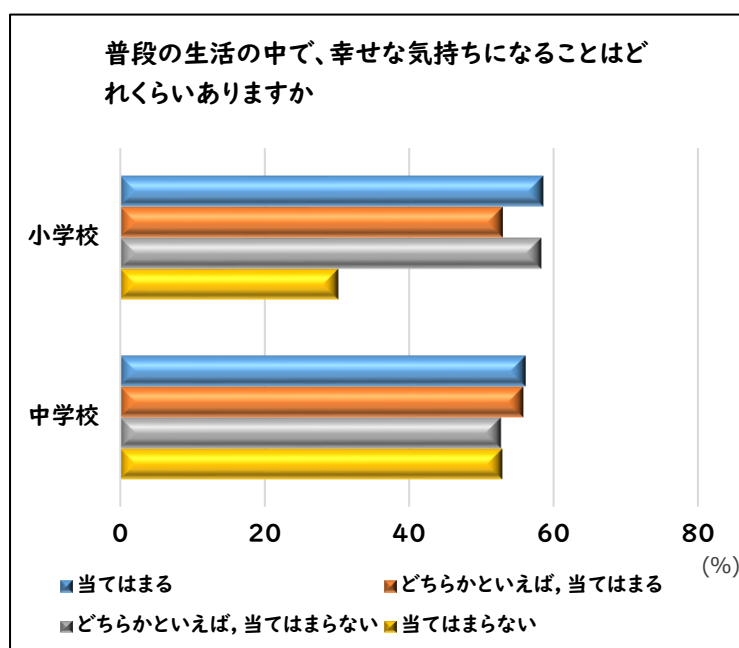
○自尊感情の観点から



「自分には、よいところがあると思いますか」という問いに肯定的に回答した子どもは、教科の正答率が高いという結果でした。

児童生徒の「自己肯定感」が、主体的な学びや学力向上の大きな支えになっていることを示しています。

次の挑戦へ向かう意欲を育むためには、テストの点数などの結果や他者との比較ではなく、本人の成長や頑張りの過程そのものに目を向け、認めて励ましていくことが重要です。



「普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか」という問いに肯定的に回答した子どもは、教科の正答率が高いという結果でした。

安心感や自己肯定感が子どもたちの主体的な学びや思考の土台となることを示しています。

同世代の仲間や大人の温かい関わりの中で育まれる安心・信頼の気持ちを大切に、挑戦する姿を称賛するとともに、失敗も成長の過程として温かく受け止め、一人ひとりの可能性を伸ばすことが大切です。

彦根市教育委員会では、これからの時代を生きるうえで重要な「非認知能力」を子どもたちに育むことをめざして、「彦根教育学びの提言 プラス『ひこねっこ ころそだての6か条』」を令和2年度に作成しました。子どもの身近にいる大人の考え方や言動等は子どもの非認知能力を育てるための重要な環境であることから、子どもたちへのメッセージと共に、大人たちへのメッセージも示しています。

全国・学力学習状況調査の児童生徒質問調査の回答状況について、「彦根教育学びの提言 プラス『ひこねっこ ころそだての6か条』」の視点で分析し、彦根市の子どもたちの育ちについてまとめました。

彦根市教育委員会は、保護者・地域の皆様とともに子どもたちに豊かな心を育てていきたいと考えています。

＜非認知能力＞3つの能力とそれぞれの能力を構成する要素

○目標の達成

・忍耐力 ・自己抑制力 ・目標への情熱

○他者との協働

・社交性 ・敬意 ・思いやり

○情動の制御

・自尊心 ・楽観性 ・自信

(出典「非認知能力が子どもを伸ばす」中山 芳一 著 東京書籍)

彦根教育学びの提言 プラス

彦根市教育委員会

ひこねっこ ころそだての6か条

い

いいんだよ ありのままで！

★子どもは、大人の温かい関わりに安心や信頼を感じます。話をじっくり聞くこと、ありのままを認めることが大切です。

い

いっほ 一歩ふみだし やってみよう！

★「まず、やってみよう！」「なんとかなるよ！」と応援しましょう。小さな成功体験や失敗から学ぶ経験の積み重ねが、子どもの力を伸ばします。

な

なぜ？どうして？は ^{まな} 学びのチャンス☆

★子どもの疑問に寄り添い、「～したい！」という気持ちを大事にして、探究心をはぐくみましょう。

お

^{おも} ^{こころ} 思いやりの心で つながろう！

★「自分なら…」「自分がされたら…」と一緒に考えながら、相手の気持ちを思いやる大切さを、子どもの心に届けましょう。

す

^{すこ} 少しのがまん ^{じぶん} 自分のために☆

★目標達成に向けて、一緒に「計画をたてる」「ルールを決める」などして、時には我慢も必要なことに気づかせながら、自分で判断し行動できる力を育てましょう。

け

^{げんき} 元気にチャレンジ ^{ゆめ} ^む 夢に向かって☆

★結果のみに注目したり他者と比べたりするのではなく、がんばりや成長をほめて励ますことが、子どもの次のやる気につながります。

彦根教育学びの提言 プラス 「ひこねっこ ころそだての6か条」
の視点での児童生徒質問調査の分析について

い

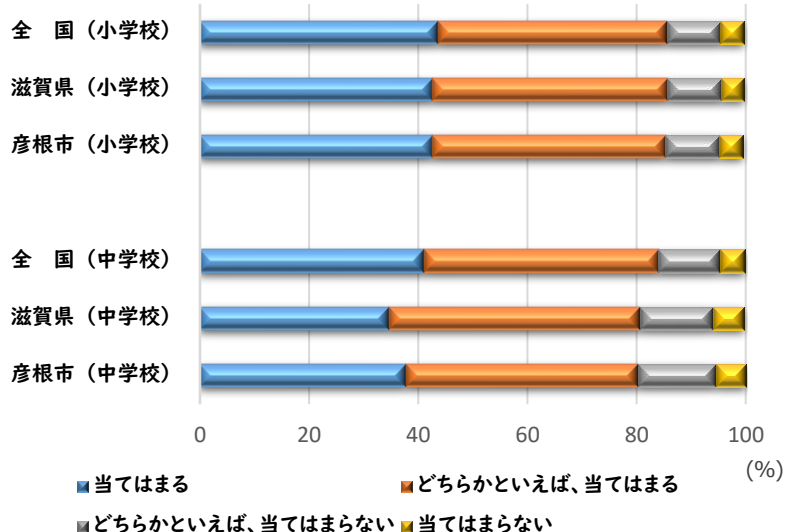
いいんだよ ありのままで！

小・中学校ともに80%以上の子どもが肯定的に回答しました。どのような自分も受け止めるためには、「ありのままの自分」を感じられる環境づくりが必要です。

学校・家庭・地域において、子どもの思いをじっくりと聴き、成功・失敗にかかわらず挑戦したプロセスそのものを認め、褒めることで、一人ひとりの自己肯定感を育みましょう。



自分には、よいところがあると思いますか



い

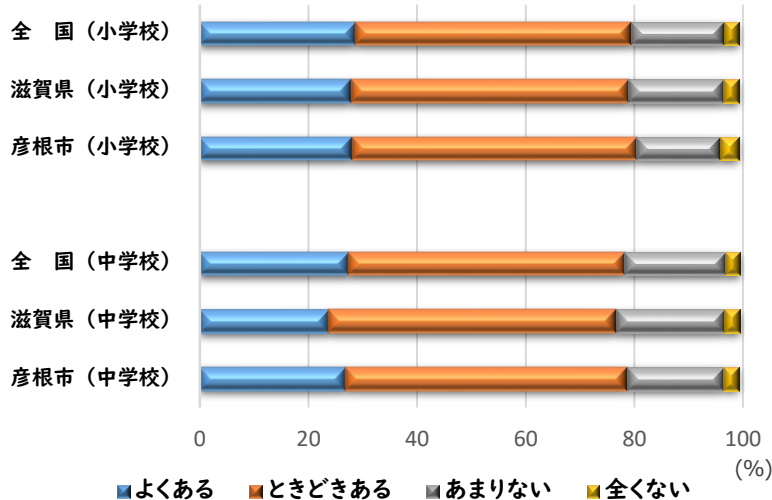
一歩ふみだし やってみよう！

小・中学校共に80%程度の子どもが肯定的に回答しました。

子どもが「どうしたらいいのかな？」と迷ったり困ったりしているときは、その気持ちに寄り添い、そっと背中を押してあげることが大切です。果敢にチャレンジしたことやそのプロセスを褒め、取組と一緒に振り返って次の見通しを持たせることで、子どもは小さな成功体験を積み重ね、自発的に一歩を踏み出す自信を深めていきます。



分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか



な

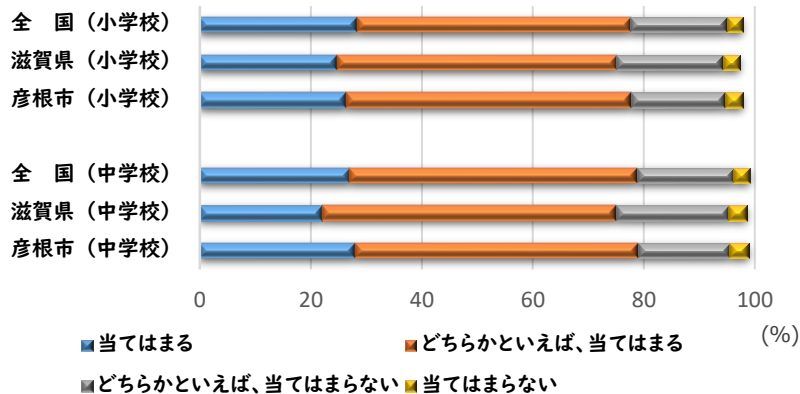
なぜ？ どうして？ は 学びのチャンス☆

小・中学校で約80%の子どもが肯定的に回答しました。

「なぜ？ どうして？」という疑問から生まれる探究心は、思考力や観察力を育む重要な土台となります。子どもの「知りたい」「やってみたい」という素直な疑問に寄り添い、大人も一緒に考えたり調べたりする姿勢を大切にしながら、自ら進んで課題に挑む態度を育てましょう。



授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか



お

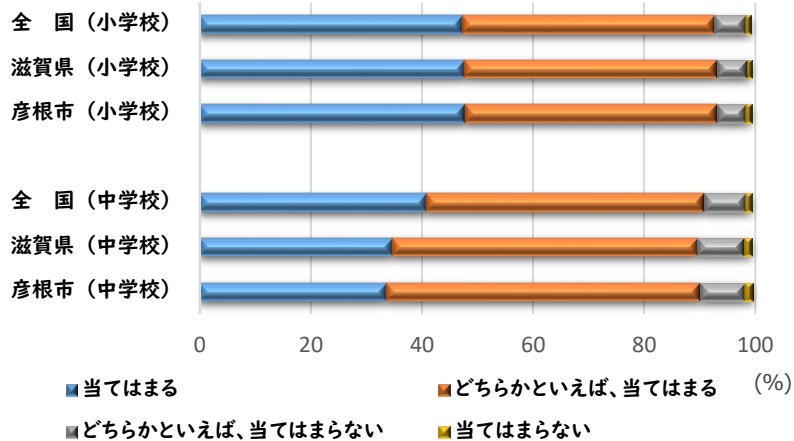
思いやりの心で つながろう！

「人が困っているときは、進んで助けていますか」「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」という問いに、小・中学校ともに80%以上の子どもが肯定的に回答しました。

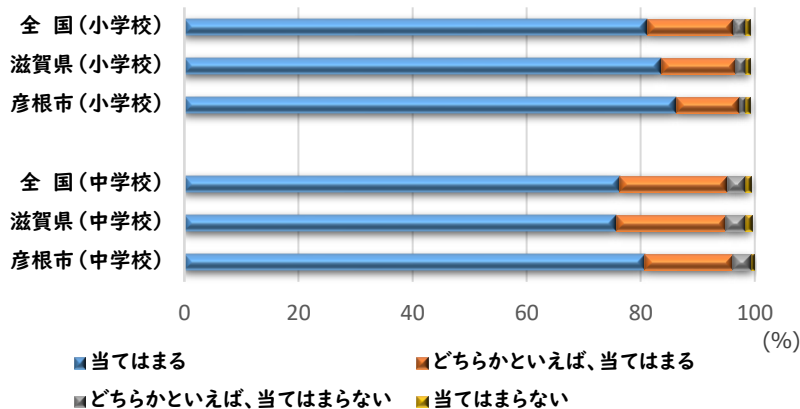
「自分ならどうするか」「相手はどう感じるか」を想像する心は、豊かな人間関係構築の土台です。日頃の困りごとや失敗の場面でも、「どうすればよかったかな？」と共に向き合い、感情を共有することが大きな学びとなります。相手の気持ちに寄り添う体験を重ね、思いやりの心でつながる仲間づくりを推進していきましょう。



人が困っているときは、進んで助けていますか



いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか

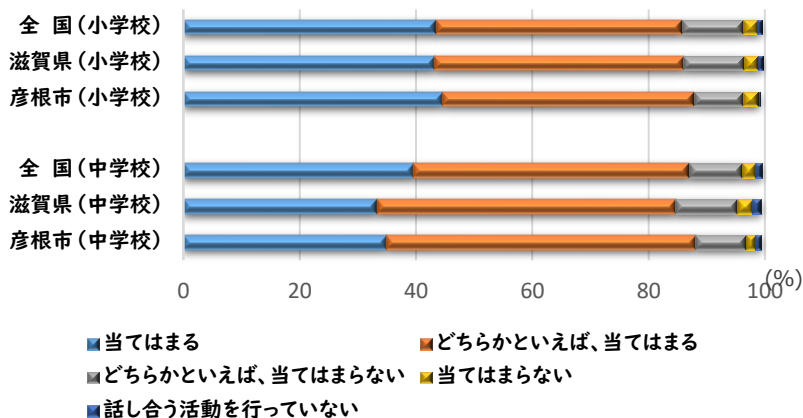


小・中学校ともに約90%の子どもが肯定的な回答をしました。友達の考えに耳を傾け、「そういう考え方もあるんだ」と新たな発見をすることは、主体的な学びをより豊かなものにします。

今後も学級での話し合いや協働的な学びの場を積極的に取り入れ、互いの考えを尊重しながら探求し合える授業づくりに努めます。



学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか



す

少しのがまん 自分のために☆

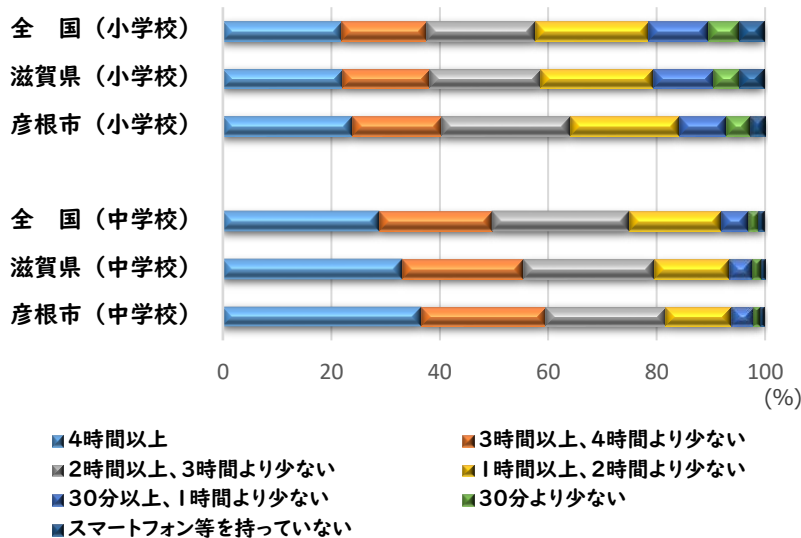
スマートフォン等の利用時間が3時間以上となる児童生徒は、小学生で約40%、中学生では約60%に及んでいます。

目標達成や心身の健康のためには、自分自身で時間をコントロールする「少しのがまん」が大切です。

「デジタルセーブ」の取組強化を推進し、自ら判断して節度ある利用ができる力を育ててまいります。

子どもたちがメディアと上手につき合い、生活リズムを整えられるよう、ぜひご家庭でも利用ルールの見直しや声かけにご協力ください。

普段(月曜日から金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、携帯電話やスマートフォンでSNSや動画視聴などをしますか(携帯電話やスマートフォンを使って学習する時間やゲームをする時間は除く)



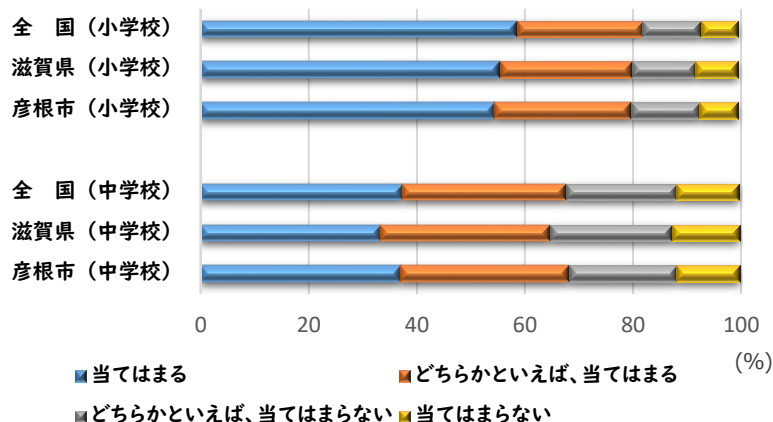
小学校では、約80%、中学校では約70%の子どもが肯定的に回答しました。

子どもが自分から「挑戦しよう」「やってみよう」とした意欲や姿勢そのものを認めることが大切です。結果のみに注目するのではなく、目標に向かう途中経過や努力を具体的に褒められた子どもは、自信を持って粘り強く取り組み続けるようになります。

一人ひとりが自分の可能性を信じ、前向きにチャレンジできるよう温かく支えていきましょう。



将来の夢や目標を持っていますか



保護者・地域のみなさまへ

変化が激しく予測困難な現代を生き抜くためには、柔軟な思考と迅速な意思決定、そして生涯にわたって自ら学び続ける姿勢が不可欠です。多様な変化を恐れることなく新たなチャンスと捉え、積極的に挑戦する力がこれからの時代に求められています。

市教育委員会では、学習指導要領で示されている「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の3つの柱の育成を目指し、教育活動を推進しています。とりわけ、子どもたちの成長の基盤となる「学びに向かう力・人間性等」に深くかかわる「非認知能力」（テストの点数では測れない「心の力」。将来の幸せや豊かさに深く関わる大切な能力）を伸ばすことが極めて重要です。

今回の調査結果を受け、各学校においては自校の分析結果を日々の授業改善に生かし、子どもたちの心を育む魅力ある授業づくりに努めています。また、子どもの興味・関心を最大限に引き出し、主体的な学びを促す工夫や学習支援の充実を図ることで、授業をきっかけとして自ら進んで学ぶ力を身に付けられるよう、きめ細やかに支援していきます。

子どもたちが豊かな学びを深めるためには、学校だけでなく家庭や地域社会が一体となった温かい支えが欠かせません。ご家庭におかれましては、日常の温かい声かけや励ましを通じて、子どもたちの自己肯定感や学習意欲を高め、気軽に相談できる関係性の構築や学習習慣づくりへのご協力をお願いします。

また、地域の皆さまにおかれましては、子どもたちが安心して過ごせる環境の整備や多様な体験・交流の機会を通じて、学びの楽しさや意義を実感できるよう温かく見守り、支えていただくと幸いです。

今後も、子どもたちが自身の可能性を深く信じ、夢や目標に向かって前向きにチャレンジし、互いを尊重し合える未来を創造できるよう、教育環境の整備に努めます。

引き続き、皆さまのご理解とご協力を心よりお願い申し上げます。